

【報告】 第12回太平洋芸術祭グアム2016に参加して

新井 隆（一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程）

1. はじめに——第22回PHA大会での研究報告

2016年5月19～21日にかけて、グアムで第22回 Pacific History Association Conference（以下、PHA大会と略称）が開かれ、筆者は Entangled war memories in Guam: Aspects of “commemorative” and “memorial” events と題する研究報告を行った。同報告では、グアムにおける戦争の記憶の表象について、日米とのつながりの中で記念・顕彰と追悼・慰霊の諸行事がはらむ「複雑さ」に着目しながら、分析・考察を行った。報告後の質疑応答でも、フロアから同島における戦争の記憶の想起には、米軍再編など島内外の社会状況が密接に関係していることが窺えた。

このPHA大会には、MO'NA: Our Pasts Before Us という大会テーマが掲げられており、オセアニア、アジア、欧米など世界各地から太平洋に関する諸研究を行っている研究者が集うとともに、3日間にわたり、様々なセッションが組まれた。開催場所も前回大会は台湾で開催され、次回大会はイギリスで開かれる予定になっている。参加者の専門分野も特に限定されておらず、考古学、美術、歴史学、カルチュラル・スタディーズなど様々な分野の研究者たちが一堂に会していた。このように専門分野の枠を越えて、幅広い視点から太平洋にアプローチする場として、PHA大会は機能していると言うことができる。

2. 第12回太平洋芸術祭グアム2016への参加

こうしたPHA大会の性格を念頭に置きながら、2016年5～6月という時期のグアムを振り返ってみると、太平洋に関するヒトやモノの交流が特に盛んだったと言うことができるだろう。それは、同大会と連続して、第12回太平洋芸術祭グアム2016が開催されたからである。筆者は、PHA大会への参加に引き続いて、初めて太平洋芸術祭にも足を運ぶことができた。太平洋島嶼国・地域の代表団が多数参加する同芸術祭は、約2週間にわたって開かれており、期間中は各国・地域の文化・芸術に加え、歴史など様々な分野でヒトやモノが行き交っていた。日程の都合上、筆者が参加できたのは最初の3～4日のみで、会場もメインのハガツニャ (Hagåtña) 周辺しか回れなかったが、その間だけでも大勢の代表団・観光客の人々を目にすることができた。実際には、グアム大学や島南部などにも会場が設置され、各種プログラムが組まれていた。同島の中心都市であるハガツニャのパセオ広場には、参加国・地域のブースが多数設けられ、各ブースにはそれぞれの国・地域の手工芸品が展示・販売されていた。さらに場所によっては、実際の製作過程を実演したりしているところもあり、一日の中で、決まった時間に自らのブースの前でパフォーマンスを披露する国・地域が見られた。また、参加国・地域のブースが集まる広場の隣には、出店のブース群が設置されており、各地の手工芸品や食べ物・飲み物が売られていた。

各国・地域のブースの中で、目に留まったのはラパ・ヌイであった。同地域のブース前では、装飾を施して現地の格好をした男性とギャラリーが記念撮影（有料）をしていた。筆者はこの光景を目にしながらか、自国・地域の文化活動をいかに表現していくかという問題を考える時、「文化の見せ方」にも注意深くあるべきだということを感じていた。つまり、ギャラリーとの関係性や表現を行う場の立ち位置に自覚的になる必要があるのではないかということに思いを巡らせていたのである。どのような方法で自らの「文化・習慣」を表現していくのかという問題は、太平洋芸術祭という場の性格とも相俟って、やはり重要な問いになっているのではないだろうか。

また、他方でギャラリーの内訳や参加国・地域のパフォーマーたち同士の交流という側面にも目を向ける必要がある。太平洋芸術祭には、各代表団のメンバーだけではなく、観光客なども足を運ぶことができるようになっている。実際にパセオ広場の会場に行ってみると、参加国・地域の代表団メンバーが他のブースを回りながら、パフォーマンスを見たり、並べられている手工芸品を手にとったりしていた。加えて、一般の観光客と思しき人々も多数見かけられた。単に代表団同士の交流に止まらず、一般の人々も巻き込んだかたちで、太平洋芸術祭は進められているということがわかる。

さらに、今回の太平洋芸術祭に参加してみて、ホスト地域であるグアムの歴史・文化の表象についても印象的だった。会場となった場所自体がグアムの歴史・文化を象徴するものであったり、そうでなくとも何らかのかたちでグアムという島の存在を表現する仕掛けが施されていた。例えば、ハガッニャにあるエンジェル・サントス記念公園（ラッテストーン公園）には、ラッテ・ストーンというグアム（マリアナ諸島）の文化的象徴が残されており、第2次世界大戦時の防空壕やグアムにおける先住民運動のリーダー的存在であったエンジェル・サントスの銅像もある。戦争の記憶やチャモロの権利運動といったグアムの歴史を語る上で、重要なトピックが同じ場所に重なっていると言えよう。また、パセオ広場に隣接する球場にある壁画もグアムの歴史を概観できるような構成であり、同島が辿ってきた歴史が端的に表現されていた。つまり、会場それ自体がグアムの歴史・文化を来場者にアピールできるような仕掛けがつくられていたのである。

3. グアム博物館の再建

ホスト地域であるグアムの歴史・文化の表象については、もう一つ重要な出来事が太平洋芸術祭の期間中にあった。それは、グアム博物館の再建である。同館は、2000年代はじめの強力な台風で甚大な損害を被り、その後常設の展示場所を確保できずにおり、間借りを繰り返しながら島内を転々としていた。館再建の目処がなかなか立たない中、台風被害後は一時マイクロネシア・モールの一画で仮展示を行っていたが、筆者が初めてグアムを訪れた2009年3月時点では、島北西部の通称・恋人岬に移転していた。そうした不安定な状況下にあったグアム博物館だったが、今回の太平洋芸術祭とコラボレーションするかたちで、ハガッニャのスキナー広場の奥に新たにオープンすることになった。2016年5月

25日の夕方から太平洋芸術祭視覚アート展 (FESTPAC's Visual Arts Exhibits) のオープニング・セレモニーが開かれ、新たな一步を踏み出したグアム博物館の門出をともに祝した。館北側のゲート前には、グアム現地の研究者や再建に携わった建築家、セレモニーのパフォーマーなど100人以上の人々が参集し、その様子を見守った。一通りセレモニーが行われた後は、館の扉が開かれ、集まった参加者たちは館内の展示を拝観していった。筆者もそれに続いたが、オープニング時の展示内容としては、太平洋芸術祭に合わせて開館されたこともあり、グアムに限らず広くオセアニアの絵画や手工芸品などが展示され、文化芸術活動の交流の場ともなっていた。台風被害から再建に至るまでの経緯を踏まえると、太平洋島嶼国・地域が一堂に会する太平洋芸術祭でグアム博物館が再出発を飾れたのは、太平洋地域におけるグアムの位置づけを再確認する上でも重要な出来事であったとすることができるだろう。さらに、グアム博物館にはシアターや屋外ステージも設置されており、芸術祭の期間中は参加国・地域のダンスパフォーマンス等の会場としても利用され、ここでも文化芸術活動の交流が行われた。

2016年11月には、展示内容を整備し直した上で、改めてグアム博物館として正式なオープニングを迎えることとなり¹⁾、再建に携わった人々からも喜びの声が聞かれた²⁾。同館のホームページを確認してみると、芸術祭の後も館内設備や企画展示の拡充に努めている様子を窺い知ることができ³⁾、今後もグアムの歴史や文化の継承・発展の拠点となっていくことが見込まれる。

4. 太平洋芸術祭の後日談

約2週間にわたって開催された第12回太平洋芸術祭グアム2016だったが、必ずしもポジティブな側面ばかりで語れない部分がある。太平洋島嶼国・地域が互いの歴史や文化の交流を進めるといふ大きなテーマがある一方で、ホスト側のコスト負担の問題は喫緊の問題と言って差し支えないだろう。グアムの地元新聞であるパシフィック・デイリー・ニューズ紙 (Pacific Daily News) は、2016年7月10日付で今回の太平洋芸術祭でグアム政府が関係機関に支払った超過分のコストについて報じている⁴⁾。その超過分の額は、全体で100万ドルを超えており⁵⁾、ホスト地域としての財政的な負担の大きさを知ることができる。この問題は、今回のグアムだけに限ったケースではなく、前回のホスト国であったソ

1) *Pacific Daily News*, November 2, 2016 (Online)

<http://www.guampdn.com/story/news/2016/11/01/guam-museums-soft-opening-set-friday/93148610/> (2017年3月5日最終閲覧) ;

Ibid., November 4, 2016 (Online)

<http://www.guampdn.com/story/news/2016/11/04/guam-museum-unveils-its-first-exhibition/93277610/> (2017年3月5日最終閲覧)

2) *Ibid.*, November 2, 2016 (Online)

<http://www.guampdn.com/story/news/2016/11/01/guam-museums-soft-opening-set-friday/93148610/> (2017年3月5日最終閲覧)

3) グアム博物館ホームページを参照。<http://guammuseum.org/> (2017年3月5日最終閲覧)

4) *Pacific Daily News*, July 10, 2016, p.1, 3.

5) *Ibid.*

ソロモン諸島では、準備運営スタッフや職人などへの賃金未払いが大きな問題にもなっている⁶⁾。このように太平洋芸術祭の準備・運営にかかるコスト負担という問題の解消は、今後の芸術祭の継続・発展を考える上で、不可避の課題であると言える。4年に1度の祭典であり、ホスト側も準備に相応の時間をかけるであろうことは想像できるが、大規模な参加者を受け入れるための準備体制整備をはじめとし、運営そのものの在り方に至るまで太平洋芸術祭に携わる者全てが熟考しなければならないように感じる。

それと同時に、芸術祭の存在を太平洋地域だけに限らず、周辺の関係国・地域にも広める試みも有意義になってくるかもしれない。太平洋地域の人々同士の交流に加えて、周りの国や地域も巻き込みながら芸術祭を発展させていくことで、より広範なかたちで「太平洋」に対する認識を深めるための機会を生み出していけるのではないだろうか。筆者が今回足を運んだグアムでは、地元政府観光局が自らのホームページで日本の観光客向けに太平洋芸術祭を紹介したりもしていたが⁷⁾、研究者や観光局といった立場の如何を問わず、一つの試みとしてこの祭典のPRに関する可能性と課題についても、目を向けてみる必要があるだろう。



【写真1】グアム博物館展示のオープニング・セレモニー（2016年5月：筆者撮影）

-
- 6) 安井真奈美「太平洋芸術祭への若者の参加と芸術の継承——第11回太平洋芸術祭（ソロモン諸島）を中心に」『古事：天理大学考古学・民俗学研究室紀要』17、2013年、63頁。
- 7) グアム政府観光局ホームページ「まだ間に合う！太平洋上の島々の祭典：第12回フェスティバル オブ パシフィックアーツ」『ウィークリーグアム：グアムの最新情報を現地より毎週配信！』（2016年6月3日配信）
<http://weekly.visitguam.jp/2016/06/12-5.html>（2017年3月5日最終閲覧）